

近自然型公園における住民の活動実態と認識に関する研究

—愛知県豊田市児ノ口公園を対象として—

1X11D031-0 金 理愛*

Rie KIM

本研究では、愛知県豊田市児ノ口公園を対象として、アンケート調査等の実態把握調査により近自然型公園におけるイベント及び維持管理活動等の活動とその主体の現状を捉え、住民の利用・参加実態や意識を把握した。また、アンケート調査から得られた「印象深い場所」の分析により、活動や関わり方による違いを明らかにした。これにより近自然型公園と住民との関わりについて、自然が持つ本来の秩序が生成された場においてイベントが果たす役割や、住民の維持管理活動への参加促進に対するアプローチを明らかにした。

Keywords : 近自然、児ノ口公園、活動主体、自然環境、実態把握、

1. 研究の背景と目的

持続可能な社会への転換が求められている昨今、都市における公園の社会資本としての価値や、その活用の重要性に対する認識が高まっている。本研究で着目する「近自然型公園」とは、元来の自然地形の秩序を活かし、生態系の自律的なシステムによって維持される“本物の自然”を呼び戻す空間として再整備したものを指す¹⁾。近自然型公園の果たす役割は、単に良好な環境をつくるだけではない。“本物の自然”と関わることの意義は、そのマニュアル化できない面倒さや向き合うことによる、自治力やコミュニケーション力等の回復でもある。これらの力は少子高齢化等の社会的な問題を抱えるわが国において、地域コミュニティを維持していくために必要な力である²⁾。近自然型公園に見られる“本物の自然”との関わりを介して自治力やコミュニケーション力等の回復を図ることが、今後の持続可能な社会の実現を目指す助けになると考える。

また、公園づくりを考える上で住民との関わりは欠かせない。近年、様々な利用形態や住民による維持管理、ワークショップによる公園づくりなど、公園と住民との関わり方は多様化・緊密化している。今後、人々の快適な暮らしに寄与する公園づくりを考える上で、よりいっそう将来を見据え、住民に目を向けた議論が求められる。

本研究では、近自然型公園における利用及びイベントや維持管理活動等の活動の現状を現地調査やヒアリング調査により把握する。また、周辺住民の利用及び参加実態、公園に対する意識をアンケート調査によって、活動を行う住民団体及び行政の現状を現地調査やヒアリング調査によって捉える。これにより、近自然型公園と住民との関わりについて、近自然型公園が持つ場の性質という観点から明らかにすることを目的とする。

2. 研究概要

2.1 既存研究

活動とその主体に関する研究として、田口ら³⁾はある地区の趣味グループについて詳細を明らかにし、地区で開催される行事のうち一つを取り上げ、その実態と各グループ・組織間の関係を示している。また、コミュニティ形成に大きな役割を果たすキーパーソンの存在を明らかにし、その性質や役割を考察している。駒田ら⁴⁾は、「今井川いこいの水辺」を対象として、コミュニティ形成に必要な要素及び評価指標に基づき分析・考察を行うことにより、住民による管理運営がコミュニティ形成に及ぼす効果について明らかにしている。

周辺住民の利用や参加に関する研究として、上山ら⁵⁾は親水公園周辺住民の利用状況や意識を中心に親水公園によるコミュニティの環境を把握し、親水公園が周辺環境に与えている影響を明らかにしている。周辺住民へのアンケート調査のほか、親水公園で行われる行事及び一つの活動団体について整理し、その意義やコミュニティの環境に与える影響について考察している。中島ら⁶⁾は、住民と学生という異なる主体の緑地に対する認識と緑地活動への参加意欲を明らかにし、より複合的な緑地評価や緑地活動の可能性を明らかにしている。また、緑地に対する認識と活動への参加意欲を、各主体が拠点とする場及び生活圏の広がりとは対比しながら論じている。

2.2 研究の位置付け

既存研究より、公園や活動について周辺住民もしくは活動団体のどちらか一方に着目した研究は進められているが、双方に着目した研究はほとんど見られない。本研究では、公園に関わりをもつ複数の主体に着目して深く追求することで、近自然型公園の意義や価値をより多面的な視点から明らかにすることに特徴がある。

3. 対象地の概要

3.1 対象地の選定

対象地は、愛知県豊田市の中心部にある「児ノ口公園」とする。児ノ口公園は、「近自然工法」を用いて小川を復元するなどして自然を呼び戻し、近自然型の都市公園として再整備された好例である。また、公園づくりに周辺住民が積極的に参加しており、現在も住民組織によるイベントや維持管理活動などの活動が盛んなことから、公園と住民とのつながりが深いと考えられる。以上のことから、近自然型公園と住民との関わりについて明らかにするために、「児ノ口公園」が対象地として適切であると考え、選定した。

3.2 児ノ口公園の概要

児ノ口公園は豊田市の中心市街地に位置し、面積約 1.9ha を擁する公園である。昭和 30 年代、戦後頃まで用排水路として利用されていた五六川を暗渠化し、グラウンドやプール等を備えた公園として整備された。平成 4 年から五六川の再生とともに公園の改修計画が検討され、平成 6 年から 7 年にかけて住民参加による近自然型公園としての整備を実施した。「近自然工法」による五六川の復元や、約 8000 本の苗木の植樹による雑木林の創出、遊具の撤去等により、近自然型の都市公園として再生した。平成 16 年には「土木学会デザイン賞」最優秀賞を受賞し、メディアや書籍などにも取り上げられてきた。しかし、その認知度は決して高くなく、未だ“次なる児ノ口公園”は現れていないという現状がある⁷⁾⁸⁾。

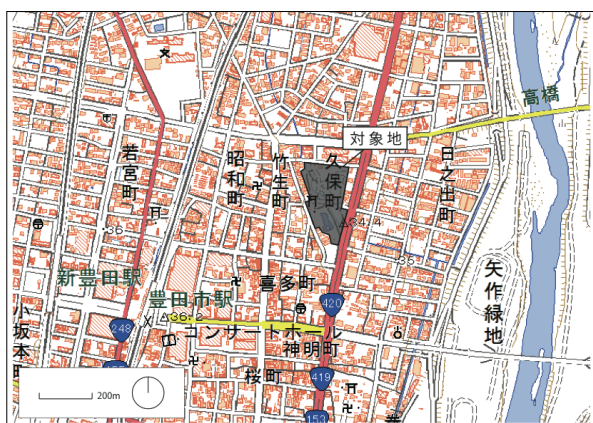


図 3.1 児ノ口公園の位置⁹⁾

3.3 児ノ口公園における住民参加の取り組み

平成 5 年に当時豊田市職員であった木戸氏らは、五六川の再生と共に都市公園を「野生化」させる計画を立てた。この「野生化」に向けて理解を得るために住民説明会を開いたが、当初住民の同意を得ることはできなかった。しかし、かつての五六川の風景を知るお年寄りが市の計画に理解を示し始め、木戸氏らと共に公園をつくり上げることとなった。

工事が始まるとお年寄り達は「現場監督」として現われ、田んぼや「ちごの庵」という集会所を建てるなど、積極的な住民参加による公園づくりが行われた。この過程で、公園づくりに携わった住民の組織である「児ノ口公園愛護会（以下、愛護会）」が自然と誕生し、現在の日々の管理やイベント活動の運営の中心的存在となっている。このように、住民が「自分のもの」という強い意識と愛着を持って主体的に管理する場が形成されていることに、児ノ口公園の存在意義や価値を見出すことができる¹⁰⁾¹¹⁾。

4. 現地調査およびヒアリング調査

4.1 現地調査

調査の概要を以下の表 4.1 に示す。

表 4.1 現地調査の概要

	日時	天候	調査内容
第1回	2014年9月7日(日) 12:00-14:30	晴れ	現状把握
第2回	2014年10月12日(日) 9:00-14:30	曇り	参与観察:秋まつり
第3回	2014年11月9日(日) 9:00-12:00	雨	参与観察:脱穀・精米
第4回	2014年11月10日(月) 7:00-16:30	晴れ	行動観察

全4回の調査を通して、対象地の自然の豊かさや空間としての心地よさを体感した。整備時に植樹された約8000本の苗木は18年の時を経て豊かに生い茂り、田んぼや池、児ノ口神社などの場が五六川を軸に見事に一つの空間内にまとまっていた。

また、維持管理活動に関して“日常的な活動”と“非日常的な活動”があることがわかった。“日常的な活動”では、「東区老人会」による週に1度の整備活動に加え、必要に応じて「愛護会」等のメンバーが集まって行う作業や「愛護会」の杉山亘氏による個人的な植栽管理など、日々の生活の一部となっているものが挙げられる。一方、「どこでもギバー隊（以下、ギバー隊）」によって月に1度行われる整備活動は“わざわざ足を運んで行う”活動であり、参加者を募って体験等も行うことから、これを“非日常的な活動”と捉える。各地域団体の活動状況を表 4.2 に示す。

表 4.2 住民団体の活動状況

	日常的な活動	非日常的な活動	イベント活動
児ノ口公園愛護会	○	○	○
東区自治会	○		○
どこでもギバー隊		○	○
とよた学生プロジェクト			○
東区女性会		○	○
シルバー人材センター			○
東区老人会「竹友会」	○		

4.2 ヒアリング調査

調査日時および対象者を表 4.3 に示す。調査には質問項目を緩やかに設定し、柔軟に対応する「半構造化インタビュー」を用いた。

表 4.3 ヒアリング対象者（敬称略、所属は調査時）

日時	対象者	所属
2014年11月8日(土) 17:00-18:30	早稲田 修史、他4名	とよた学生プロジェクトOB・OG
2014年11月9日(日) 9:00-11:00	「脱穀・精米」参加者4名	どこでもギバー隊
2014年11月10日(月) 18:00-19:30	山崎 淳	トヨタ自動車労働組合TUV事務局 (どこでもギバー隊)
2014年11月11日(火) 10:00-11:00	鶴見 盛人	豊田市公園課副課長

周辺住民との関わりについて、「とよた学生プロジェクト（以下、学プロ）」OB・OGへの調査の中で、『地域の子がいなくて。トヨタ系の子供達しか来なくなっちゃって。』という発言があった。また、山崎淳氏は地域の人々からのギバー隊への不満について触れた。原因として作業が終わるとちごの庵にて飲み食いするなど、周辺住民にとっては“占領”ともとれる行動をすること、『地域からだんだんあそこに行きにくい』という意識を持たれるようになったと話した。このことに問題意識を持ち、数年前から地域の住民と関わりながら活動していく方向にあると述べた。

行政に対する調査からは、公園課が直接的に児ノ口公園での維持管理活動を行うことはなく、「児ノ口公園管理協会（以下、管理協会）」を介して委託していることを把握した。イベントについても全て「管理協会」に使い方を任せており、公園課は現在行なわれている活動に口を出すことはほとんどないことが分かった。このように一歩離れた立場をとるのは、『ここ（児ノ口公園）は本当リーダーシップを発揮する人達がかなり本当にすごいしっかりするので』『管理協会』の意見を尊重したいと考えているためである。「学プロ」「ギバー隊」及び行政の今後の課題について表4.4にまとめる。

表4.4 各対象における今後の課題

とよた学生プロジェクト	引継ぎの難しさ
どこでもギバー隊	地域(自治区)の参加と新たなメンバーの確保
豊田市公園課	地域で後継者を作って「管理協会」を存続

5. アンケート調査

5.1 アンケート調査の概要

1) アンケート調査の概要

対象者を「来訪者」と「周辺住民」に分けて調査を実施する。各調査の概要を以下の表5.1に、周辺住民に対するアンケートの配布範囲を以下の図5.1に示す。

表5.1 アンケート調査の概要

	「来訪者」アンケート	「周辺住民」アンケート
配布日	2014年10月12日(日)「秋まつり」	2014年11月8日(土)～11日(火)
締切日	2014年10月26日(日)	2014年11月28日(金)
配布方法	直接配布 (「秋まつり」来訪者に配布)	ポスティング (戸建・集合住宅問わずランダムに配布)
回収方法	郵送回収	郵送回収
配布数	64部	1000部
回収数	33枚	167枚
回収率	50%	17%



図5.1 「周辺住民」アンケート配布範囲

2) アンケートの設問内容

アンケートの設問内容を表5.2に示す。なお、「周辺住民」アンケートは、「来訪者」アンケートの質問項目を修正し、新たに質問を追加して作成した。そのため追加質問に※印をつけている。

表5.2 アンケートの設問内容

回答者の属性	性別、年齢、職業、居住地、居住年数、建物タイプ※
イベントへの参加実態・意欲	参加経験あり どの立場での参加か※、参加回数、満足度、印象に残った体験 参加経験なし 参加しない理由、今後のイベントに対する参加意欲
維持管理活動への参加実態・意欲	参加経験あり どのように行ったか※、印象に残った体験や感想※ 参加経験なし 参加しない理由、今後の維持管理に対する参加意欲 (【あれば参加したい】→参加しても良い頻度)
日常における利用実態	利用頻度、利用目的
対象地に対する認識・印象	平面図内に印象深い場所を記入(理由や実体験等も) 再整備に対する認識(【知っている】→再整備前との比較) 住民による維持管理活動に対する認識、対象地の全体的な印象※ 対象地に対する愛着、他の公園との違い、不満・要望

5.2 アンケート調査の結果

1) 回答者属性

各アンケート回答者の性別および年齢を図5.3に、居住年数を図5.4に示す。性別・年齢について来訪者で見られるような大きな偏りは、周辺住民には見られない。居住年数について、周辺住民では【30年以上】という割合が高くなっている。

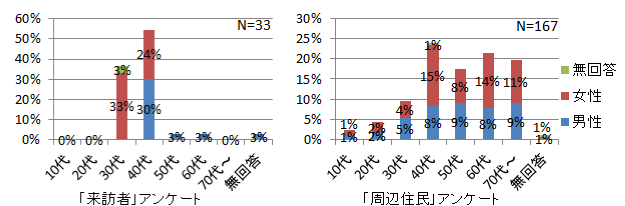


図5.3 回答者の性別および年齢

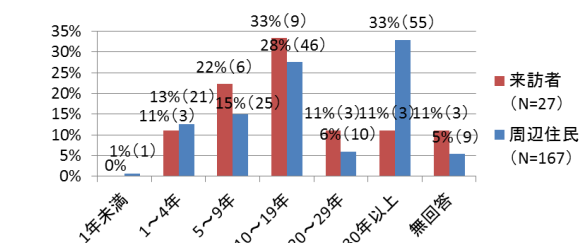


図5.4 回答者の居住年数

2) 過去の活動への参加実態

過去のイベント及び維持管理活動への参加経験は、以下の図5.5に示すとおりである。活動に参加しない理由については、イベント・維持管理活動共に両対象者で【活動の存在を知らない（知らなかった）】という回答の割合が最も多かった。

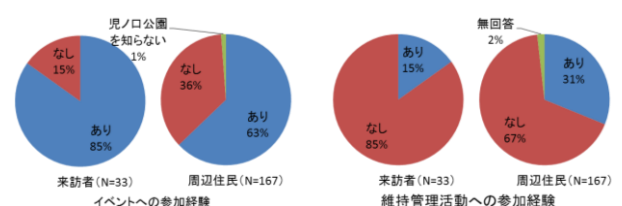


図5.5 過去のイベント及び維持管理活動への参加経験

3) 今後の活動への参加意欲

今後のイベント及び維持管理活動への参加意欲は以下の図5.6に示すとおりである。維持管理活動について【あれば参加してもよい】という回答者に対し、参加頻度の許容範囲について質問したところ、来訪者では81%、周辺住民では69%が【年に数回】であれば参加してもよいと考えているという結果が得られた。

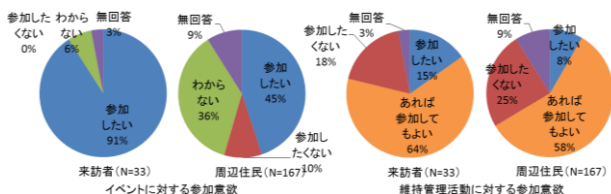


図5.6 今後のイベント及び維持管理活動に対する参加意欲

4) 日常時における利用実態

イベントが行われない日常時について、周辺住民でも15%は利用したことがないことが分かった。利用経験がある回答者の利用頻度を図5.7に示す。また、利用目的については、両対象者共に【散歩】という割合が最も高く、その他に来訪者では【家族と遊ぶ】、周辺住民では【通り道】という割合が高かった。

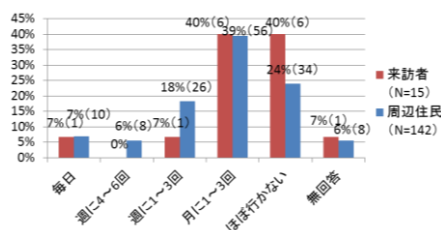


図5.7 日常時における利用頻度

5) 対象地に対する印象・認識

再整備および住民による精力的な維持管理活動に対する認知度を図5.8に示す。周辺住民においては、住民による維持管理活動の存在に対する認知度は来訪者よりも低く、再整備前との比較について来訪者では無かった悪い評価が見られた。また、不満がある回答者の割合は周辺住民の方が多く、一人当たりの平均不満数も周辺住民の方が多い。周辺住民の不満で多く見られた内容を表5.3に示す。公園に対する愛着については両対象者共に70%弱が「愛着がある」と回答しているが、周辺住民の方が【非常にある】という割合は高い一方で、【あまりない】という割合も若干高い。

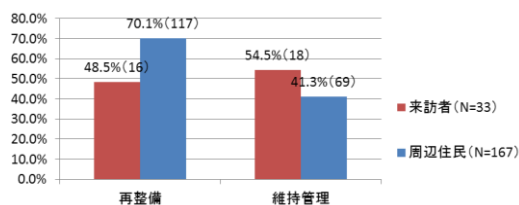


図5.8 再整備および住民による維持管理活動の存在に対する認知度

表5.3 周辺住民の不満・要望の内容

防犯・安全面	ハード面	ソフト面、他
・夜暗い(照明含む) ・薄暗い ・不審者 ・見通しが悪い ・枯れ木にぶつかる	・遊具やプールがない ・池の水が汚い ・落ち葉が多い ・トイレ ・池の橋の整備	・子供が遊んでいない ・人がいない ・イベントの案内

6. 「印象深い場所」に対する分析・考察

6.1 「印象深い場所」に対する自由記述の分析・考察

「印象深い場所」として挙げた場所に対する周辺住民の利用や印象深さの特徴を明らかにするために、場所に対する自由記述の頻出語を抽出し、分析を行った。分析対象とするのは、一つの場所に対して6名以上の自由記述の回答がある場所とした。ここでは自由記述数が多かった上位6箇所を取り上げ、分析結果を記す。

表6.1 分析対象と回答数および自由記述数

分析対象となる場所	回答数	記述数	分析対象となる場所	回答数	記述数
多目的広場	32	27	池のあずま屋	11	7
田んぼ	17	15	雑木林エリア	10	10
池	15	15	五六川(中央)エリア	9	7
桜並木	15	13	神社エリア	8	7
児ノ口神社	15	11	田んぼエリア	7	6
五六川(多目的横)エリア	13	12	浮島エリア	7	6
木橋エリア	12	12	丸木橋エリア	6	6
ちこの庵	12	9	池北側エリア	6	6

「多目的広場」では最頻出の【子供】に加え、【ボール】等の遊びに関する語が多いことから、子供の遊び場としての印象が非常に強く示されている。また、【イベント】【会場】等の語からイベントでの印象も強いことが分かる。「田んぼ」では米作りに関連した語を抑え、【ザリガニ】が最頻出となっている。また、【ホタル】等の生物の名前が多く挙がっていることから、生物の存在に対する印象が強いと言える。「池」では様々な生物が挙がり、【見る】【観察】という語があることから、多様な生物の様子を見ることが出来る場所であることがわかる。

表6.2 「多目的広場」「田んぼ」「池」での頻出語

多目的広場			田んぼ			池			
抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
子供	7	楽しい	2	ザリガニ	9	刈り取り	1	子供	4
遊ぶ	6	祭り	2	子供	3	感じる	1	鯉	3
夏	5	自転車	2	ホタル	2	季節	1	カエル	2
イベント	4	場所	2	福作	2	牛かえる	1	ザリガニ	2
ボール	3	走り回る	2	田植え	2	経験	1	汚い	2
遊び	3	盆おどり	2	トンボ	1	古米	1	亀	2
サッカー	2	友人	2	バッタ	1	子	1	思い出す	2
運動	2	練習	2	メダカ	1	思い出	1	釣る	2
家族	2	多い	2	一穂	1	見る	1	エサ	2
会場	2	…	…	稲刈り	1	…	…	カワセミ	1
								運れる	1

「桜並木」では、【桜】【春】等の語から周辺住民が花見に訪れることがわかる。また、【紅葉】【秋】という語から、秋にも楽しめる場所であることが示されている。「児ノ口神社」では【参拝】以外にも【気持ち】【落ちつく】等の気持ちに関する語が含まれている。「五六川(多目的横)エリア」では、【花】【季節】【美しい】という語から、季節の花である【ヒガンバナ】【紫陽花】が美しく咲く様子が印象的であることがわかった。

表6.3 「桜並木」「児ノ口神社」「五六川(多目的橋)」での頻出語

桜並木		児ノ口神社		五六川(多目的橋)エリア	
抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
桜	8	子供	1	子供	4
春	5	参拝(お参)	3	ザリガニ	3
きれい	5	気持ち	2	音	3
花見	4	散歩	2	喜ぶ	3
見る	2	子供	2	気持ち	2
季節	1	落ちつく	1	感じる	2
美しい	1	あたたか	1	光	2
景色	1	ドキドキ	1	幸せ	2
紅葉	1	違う	1	散策	1
行く	1	印象深い	1	ヒガンバナ	1
咲く	1	我	1	思い出	1
		...	...	ホテル	1

6.2 設問項目別可視化による分析

周辺住民の利用や印象に関係している要因を探るために、「周辺住民」アンケートの設問項目別に「印象深い場所」を表すことで分析を行った。

「来訪者」アンケート及び「周辺住民」アンケートの結果を図6.1に示す。来訪者では「田んぼ」等のイベントで使われることの多い場所に回答が集中し、周辺住民では「児ノ口神社」「池のあずま屋」に回答が集中していることが来訪者と大きく異なる点として挙げられる。

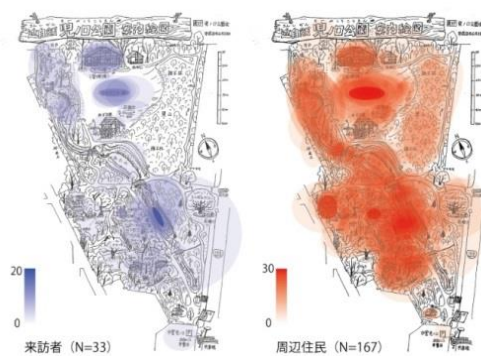


図6.1 アンケートの対象者別「印象深い場所」

イベントへの参加経験の有無別で表した結果を図6.2に示す。参加経験がある回答者ではイベントのメイン会場となることが多い「多目的広場」「ちごの庵」に回答が集中している。その他に「木橋エリア」「田んぼ」「池のあずま屋」にも回答の集中が見られる。一方で、参加経験がない回答者では「児ノ口神社」を示す回答が圧倒的に多い。

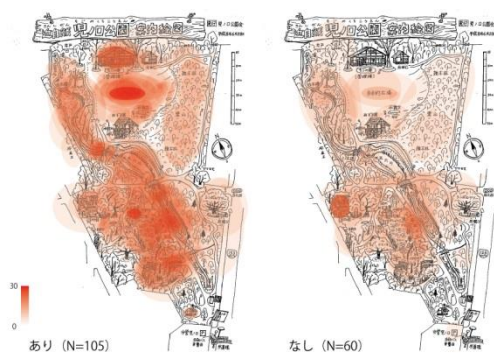


図6.2 イベントへの参加経験の有無別「印象深い場所」

再整備について知っている回答者を対象とした再整備前との比較を段階別で表した結果を図6.3に示す。【大変良くなった】では「五六川上流」「田んぼ」、【良くなった】では「ちごの庵」「池」「浮島エリア」「児ノ口神社」が多く示されている。一方【悪くなった・大変悪くなった】では、「児ノ口神社」が他に比べて多く示されている。

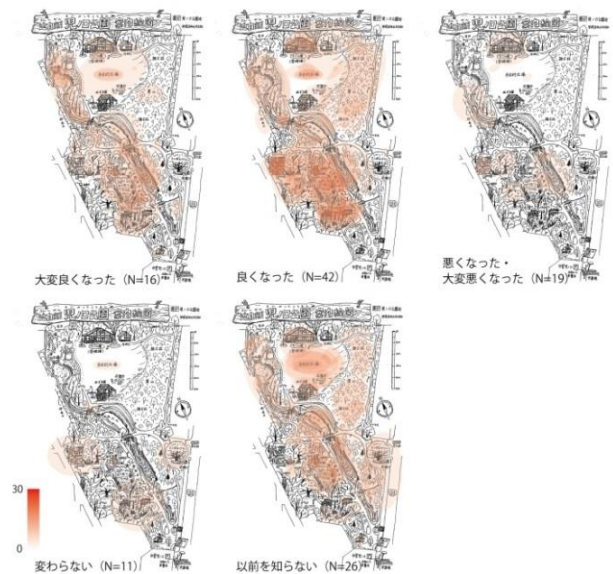


図6.3 再整備前との比較別「印象深い場所」

6.3 「印象深い場所」に対する考察

1) 「印象深い場所」となりうる特徴

対象とした16箇所の自由記述の分析から「印象深い場所」として挙げられる場所には、「子供との思い出」「季節の変化を楽しめる植物」「多様な生物とのふれあい体験」という特徴が見られた。

2) 設問項目別「印象深い場所」に対する考察

来訪者と周辺住民では、周辺住民のみ「児ノ口神社」「池のあずま屋」に回答が集中していることから周辺住民の利用では「気持ちを落ち着かせる」ということも重要なポイントとなることがわかる。また、イベントへの参加経験については、参加経験がある回答者では「多目的広場」「ちごの庵」等、特にイベントの印象が強い場所に回答が集中し、参加経験がない回答者ではイベントとの関連が少ない「児ノ口神社」に回答が集中している。このことからイベントへの参加経験と印象深さとの関連が読み取れる。

再整備前との比較において、【大変良くなった】とする回答者では「五六川上流」「田んぼ」が多く示されており、「多様な生物とのふれあい体験」や「季節の変化を楽しめる植物」が良い評価の要因となっているのではないかと推測できる。また、愛着が大きくなるにつれて「五六川上流」「田んぼ」「桜並木」

に回答が集中しており、“多様な生物とのふれあい体験”や“季節の変化を楽しめる植物”と愛着の深さとの間にも関連があると考えられる。

7. 結論

7.1 活動実態と認識に関するまとめ

実態把握調査および「印象深い場所」の分析から得られた結果を以下に整理する。

- 1) 現地調査から、対象地では自然がもつ本来の秩序が見事に生成されていることや、維持管理活動に“日常的な活動”と“非日常的な活動”があることを把握した。
- 2) ヒアリング調査から、過去に地域の住民から「ギバー隊」の“占領”について不満が挙がっていたが、ここ数年は地域との関わりを意識した活動をしていることが明らかとなった。また、豊田市公園課は対象地での活動に対して直接口を出すことはせずに「管理協会」を介して対応することが分かった。
- 3) アンケート調査から、活動に参加しない理由として【活動知らない】の割合が両対象者共に最も多く、住民による精力的な維持管理活動の存在についても半数以上の周辺住民が知らないことが明らかとなった。日常時の利用について、周辺住民の利用は多いが、利用目的としては【散歩】【通り道】という割合が高いことが分かった。また、周辺住民が抱く不満の内容は様々であるが、樹木の多さによる防犯・安全面の問題に対する不満が多く見られた。
- 4) 「印象深い場所」の分析から、“子供との思い出”“季節の変化を楽しめる植物”“多様な生物とのふれあい体験”という「印象深い場所」の特徴を明らかにした。また、イベントへの参加経験と印象深さとの関連や、“多様な生物とのふれあい体験”及び“季節の変化を楽しめる植物”という特徴を持つ場所と対象地に対する評価の良さとの関連を明らかにした。

7.2 近自然型公園と住民との関わり

本研究では、実態把握調査により対象地におけるイベント及び維持管理活動等の活動とその主体の現状を捉え、住民の利用・参加実態や意識を把握した。これにより近自然型公園と住民との関わりについて考察する。

再整備から約20年経った現在、緑は豊かに生い茂り池や川には多様な生物が棲むなど、児ノ口公園には自然が持つ本来の秩序が生成されている。「印象深い場所」の特徴から、周辺住民も自然を身近に感じられる場が形成されていると言える。対象地において周辺住民が自然とふれあう機会は“イベント”とイベントが行われない“日常時”に大別できる。散歩しながら自然を眺めるというような受動的なふれあいが主となる日常時に

比べ、イベントでは稲刈りやザリガニ釣りなどの主動的なふれあい体験ができる。このことから近自然型公園において、イベントは日常的には味わうことができないような近自然ならではの魅力を感じられる重要な活動であると言える。

このように自然の本来の秩序が生成された場やその魅力を感じられる活動を継続するために維持管理活動は欠かせない。しかし、アンケート結果から維持管理活動への参加経験がある周辺住民は少なく、参加したことがない住民の多くが活動について知らないことが明らかとなった。対象地の存在が身近であるはずの周辺住民が活動を知らない要因として、「活動の周知方法の問題」や、住民による精力的な維持管理活動に対する認知度の低さから「住民の公園に対する関心の無さ」が挙げられる。

児ノ口公園の継続という視点から、目指すべきは“日常的な活動”および“非日常的な活動”への継続的な参加である。しかし、維持管理活動への参加経験の無い住民にとって“日常的な活動”への参加はハードルが高い。そこで、イベントと“日常的な活動”の中間的な位置にある“非日常的な活動”への参加を促すことが効果的であると考ええる。“非日常的な活動”がトヨタ労組関係だけでなく周辺住民に広く周知されるように宣伝方法を工夫することで、維持管理活動に対して「あれば参加しても良い」と考えている住民の参加の促進が期待できると考えられる。

<参考文献および注釈>

- 1) 福留脩文：「近自然の歩みー共生型社会の思想と技術ー」，信山社サイテック，2004
- 2) 中村良夫，鳥越皓之，早稲田大学公共政策研究所：「風景とローカル・ガバナンス 春の小川はなぜ失われたのか」，早稲田大学出版部，2014
- 3) 田口慎子，曾根陽子：「コミュニティ形成に果たすグループ活動とキーパーソンの役割ー1960年代のミニ開発住宅地における近隣交流に関する研究 その3ー」，日本建築学会計画系論文集，第75巻，第348号，pp. 343-351，2010
- 4) 駒田健太郎，渡辺達三：「今井川いこいの水辺における住民による管理運営活動がコミュニティ形成に及ぼした効果」，ランドスケープ研究，Vol. 69，No. 5，pp. 627-630，2006
- 5) 上山肇，若山治憲，北原理雄：「親水公園の周辺環境に関する研究ー親水公園が周辺住民のコミュニティ形成に与える影響ー」，日本建築学会計画系論文集，第465号，pp. 105-114，1994
- 6) 中島敏博，田代順孝，古谷勝則：「住民意識と学生意識にみる緑地との関わり方の現状と緑地活動への参加意欲」，ランドスケープ研究，Vol. 69，No. 5，pp. 699-704，2006
- 7) 松江正彦，小栗ひとみ，福井恒明，上島顕司：「景観デザイン規範事例集（道路・橋梁・街路・公園編）」，国土技術政策総合研究所，pp. 40，2008
- 8) 篠原修，内藤廣，二井昭佳：「GS群五連帯編 まちづくりへのプレイクスルー 水辺を市民の手へ」，彰国社，pp. 102，2010
- 9) 国土地理院 S=1/25000地形図（拡大使用）を元に加筆
- 10) 松江正彦，小栗ひとみ，福井恒明，上島顕司：「景観デザイン規範事例集（道路・橋梁・街路・公園編）」，国土技術政策総合研究所，pp. 41，2008
- 11) 8)に同じ，彰国社，pp. 68-69，2010